

くじら企画 第九回公演

「夜、ナク、鳥」

作・演出 大竹野正典

登場人物

イシイ
ヨシダ
イケガミ
ツツミ
エイジ
ゴウ
ミチロウ
ヒデキ
執刀医

◆ Act 1

突然、電話が鳴った。

イシイが現れた。受話器を取る。

イシイ
—— はい イシイです

受話器

イシイ
—— もしもし—— どなた様？

受話器

イシイ
—— もしもし——

受話器

イシイ
—— ええ加減にしいやっ！

イシイ、受話器を戻した。

イシイ
あほちゃうか ホンマ——

イシイ、行こうとするとまた電話が鳴り出す。
イシイ、睨みつけるように、受話器を取った。

イシイ
—— はい——

受話器

イシイ
—— ちよっと どういう事？—— あんた誰や？

受話器

イシイ
—— こんなの事して 何が面白いんや アホッ！

イシイ、再び受話器を置いた。

イシイ 誰やる？ 気持ち悪い ——

イシイ、思い立って電話しようと受話器をつかんだその時、再び電話が鳴り出した。

イシイ、電話を睨んだままあとじさった。

ヨシダが現れた。ヨシダ、イシイの肩を背後から抱きとめた。

◆ Act 2

ヨシダ それが毎日、三十回も？

イシイ そうやねん 朝でも夜でも 番明けて家帰ったら 電話が鳴りよんねん うちのことどっかで見張ってんのと違うやろか

ヨシダ 気持ち悪い奴やなア

イシイ ストーカーされてたら どないしよう？

ヨシダ イシイにストーカー？

イシイ 違う思う？

ヨシダ 違う違う 自分の歳考えてみ そらツラの皮厚過ぎや

イシイ　　そうやるか？

ヨシダ　　ゴウちゃんやで　きつと

イシイ　　ゴウが？ゴウが何でウチに無言電話なんか掛けてくんのよ

ヨシダ　　ゴウちゃんのコレや(小指を立てた)

イシイ　　ゴウのコレ？(真似して小指を立てた)

ヨシダ　　おそらくな

イシイ　　アホクサ　関係あれへんわ　ゴウが誰と付き合おうがウチはもう関係あれへんし

ヨシダ　　そんなん云うても　あんたらまだ籍入ったままやろ

イシイ　　そやからなんやの？なんでウチがゴウの女から　無言電話なんか掛けられなあかんの？

ヨシダ　　籍が入ってるいうんは　まだイシイがゴウちゃんの妻や云う事や　嫉妬深い女やったら　無言電話

イシイ　　くらい掛けてくるかも知れへん

イシイ　　嫌やわア　最低やな　そんな女　寒イボ出るわ

ヨシダ　　まあ憶測に過ぎんけどな　けっこう濃厚な線やと思うで　ウチは

イシイ　　ヨシダの云う事　当たってるかも知れへん　他に心当たりあれへんもんな　無言電話なんかされる

ヨシダ　　調べたるか？

イシイ　　え？ヨシダが？　——　どうやって？

ヨシダ　　知り合いの先生がおるねん　その人に頼んだら一発やで

イシイ　　何してはる人？

ヨシダ

云うたら金融会社の社長さんかな　市会議員の先生にも顔の聞きはる人やねん　——　盲腸アツベのオペ
に来はった時　知りおうてん

イシイ
ふうん

ヨシダ まあ まかしとき 間違いないから あの先生やったら

イシイ ヨシダ あんたつてエエやつやなア 頼りにしてるわ

ヨシダ 聖徳看護専門学校三十四期生のヨシミや それにゴウちゃん最初に紹介したんも ウチやしなア

—— あんた ゴウちゃんからちゃんとお金貰てんのか？

イシイ まあ ゴウもそこらへんは律儀やからな 毎月ちゃんと振り込んでくれとるわ

ヨシダ そうか イシイも三人子供抱えて大変やもんなア

イシイ 同じじゃん ヨシダかて子供二人育ててんねやし

ヨシダ そやけど ウチにはダンナが残した保険金があったからな あれのお陰で楽さして貰てるわ それ

でも仕事辞める訳にはいかんけどな

イシイ ホンマ 手に職あつて良かったわ パートなんかで食うていかれへんもんなア

ヨシダ 今度 子供連れといでや 一緒にご飯でも食べよ

イシイ そらええなあ

ヨシダ ウチらひとりもん同志一致団結せなてな イケガミともよう云うてんねん

イシイ そういうたらイケガミも ダンナ亡くなつたんやなア ——もう二年前か

ヨシダ あそや あんた知ってるやろ そのの駅前は今 建設中のマンション？

イシイ ああ なんかやつてるなア今

ヨシダ この前 ツツミとイケガミの三人でな モデルルーム見に行つてん キッチンがこうL字形になつ

ててな 使い勝手がめっちゃええねん リビングも広うて明るい 小学校も中学校も近いし スーパー

——かて三軒あるやろ ウチら決めてん 明日手付打つねんけど どや イシイも乗れへんか？

イシイ ええ？！ そんなマンションなんて急に言われても —— ウチ 貯金かて そんな無いし ——

ヨシダ 住宅金融公庫申し込んだらええねん ウチらみんなそうやで 頭金百万だけ用意せなあかんけど

あとは毎月家賃払うぐらいの値段や 皆ダンナおれへんし 後々の事考えたら今思い切って買うといたほうが得やて 何か困った時でも 同じマンション住んどったら 何かと心強いしな
そんなん 急に云われても ウチ困るわ

ヨシダ 困る事なんかあるかいな —— なんやったら頭金の百万貸したつても構えへんねんで —— そや
今から見に行こ

イシイ 見に行くて 何を？

ヨシダ モデルルームに決まってるやないの あの部屋見たら イシイもめっちゃ気に入る思うねん（行こ
うと）

イシイ ち ちよつと待つてよ ヨシダ

ヨシダ 早よせな 売り切れてまうで

イシイ 困るて ウチ そんなん —— 待つてえやヨシダ ——

イシイ、ヨシダの後を追って去った。

イケガミがすでに現れていた。

一人でつましい食事をしている。

エイジが現れた。

◆ Act 3

エイジ またお茶漬けか

イケガミ うるさいなア ほつといてよ

エイジ そんなもんばっかり食うとって もっと栄養のあるもん食わないかんぞ

イケガミ あんたに云われる筋合いないわ ウチはこのコナスの丸漬けがあつたら生きていけるねん（ポリポ

リ噛む)

エイジ たまには肉も食べ 看護婦なんかハードな仕事してんねんからナスビばかり食うとったら倒れて
しまうぞ

イケガミ やいやい云わんとって ウチにはウチの栄養管理があるんや シロウトは黙るとき

エイジ ナスビは体が冷えるんやで —— (後ろから抱きついた) 云わんこっちゃない こんなに身体が
冷えてしても ——

イケガミ (振り払って) 離さんか 気持ち悪い どっか行け!

エイジ —— 肉食いたいなあ

イケガミ 知るか

エイジ 鹿の肉や 鹿の肉 タタキにしたら美味いからなあ

イケガミ 勝手に鹿の肉でも猪の肉でも食べたらええやないの

エイジ あかん猪は臭いんや あれは味噌で味付けな食えたもんやあらへん そこへ行くと鹿の肉はなんと

も云えん味わいがあるなあ あれは草食動物特有の味わいや 何でも見境なしに食うてる動物の肉
は俺の口にあわんのやなあ —— なあおまえもそう思うやろ

イケガミ (黙々と食べている)

エイジ 事にあそこの鹿が美味しいのはな あれはきつと鹿せんべいに秘密があると思うねん 鹿せんべいに
含まれてる何かの成分が鹿肉に旨みを付けるんやなきつと —— ああまた鹿撃ちに行きたいな

あ 春日大社に

イケガミ あほが

エイジ 誰があほや

イケガミ あんたや バチが当たったんやあんた 神さんの使い撃ち殺して食べたバチや

エイジ おまえかて美味い云うて食べとったやないか 鹿のタタキ

イケガミ　ウチは食べても殺したりせえへんわ　春日大社の鹿なんか

エイジ　そない云うけどな　なかなかおれへんねんで　関西一円に鹿なんか――　春日大社ぐらいのもんやで　あんなにうようよ鹿が居るのは

イケガミ　あれはああやってわざと放し飼いにしてあるの　誰もあんたが夜中に鹿撃ちする為に放してる訳やあれへんわ

エイジ　そんな堅い事云うなよ　判れへんて　あんな仰山居るうちのー頭や2頭

イケガミ　ウチが知ってるだけでももうすでに4頭殺ってるあんたは

エイジ　そうやったかな

イケガミ　そうや間違いない

エイジ　もう一遍食べたいなあ　春日大社の鹿

イケガミ　ごちそうさま

エイジ　なんやもう食べたんか　食事はもつとゆつくり摂らんとあかんで

イケガミ　食事に時間掛けられる程　ウチは余裕ないねん

エイジ　なんや　今から出勤かいな？

イケガミ　銀行行かなあかんの

エイジ　銀行でお前　おととい今週の生活費出してきたとこやろ　もう使こてしもたんか

イケガミ　あんな　あんなのせいでウチがどれだけ儉約せなあかんか知ってる？　あんなのせいでウチの生活

メチャメチャになつてんで

エイジ　それは済まん思うけど――

イケガミ　――　ウチニ出る事に決めてん

エイジ　え　なんで

イケガミ　あんたがうつつとうしいからや

エイジ そんな事云うなよ 俺 おまえの事好きやで
イケガミ 聞きとらない 寒イボ出るわ

エイジ —— 二こ出てどこ行くつもりや

イケガミ あんたの居らへん所

エイジ なあ もう迷惑かけへんからそんな事云うなよ 二こに居たらええやんか

イケガミ ウチもう決めてん マンション買うねん

エイジ そんな金がどこにあるんや

イケガミ あんたに関係あるか

エイジ —— ヨシダ違うんか？お前またヨシダにそそのかされてるんやろ

イケガミ そそのかすて —— ヨシダをあんたと一緒にせんとして

エイジ あいつお前の金全部持っていったやないか

イケガミ ウチの金？ウチの金て何や？

エイジ お前の金や それをヨシダは ——

イケガミ ちよつと待ち あんたヨシダにあれ程借金しといてよう云うなあ ウチがどんだけ恥ずかしい思い

したか 知らんとは云わせへんで —— あなたの競馬狂いと女狂いで泣いとたウチをヨシダが

どんなに親身になって慰めてくれたか —— あんたにヨシダの悪口云う権利なんかあらへん

エイジ 済まん —— 俺が言い過ぎた せやけど ——

イケガミ ヨシダ ウチに二百万くれたんや

エイジ え？

イケガミ マンションの頭金にしていって二百万くれたんや —— もちろん断ったけど どうしても受け取って

て —— そやないどうもきづつないて —— ウチの通帳に二百万振り込んでくれたんや

エイジ —— そうか

イケガミ あほ！ あんたなんか生まれてけえへんかったら良かってん ウチをこんなに苦しめてから——
エイジ 濟まんかったわ 許してえな

イケガミ いまさら遅すぎる云うねん ボケ！

エイジ そやから俺反省してるやん——俺 お前の事放つとかれへん

イケガミ フン 引っ越したらもうあんたとはおさらばや

エイジ そんなん云わんと——そや 引越してもかめへんから俺も連れていってえな

イケガミ (ビックリした) なんやて！あんた今何云うた？

エイジ そやから俺もついてってかまへんやろ？

イケガミ あんた ええ加減にしいや

ピンポンとチャイムが鳴った。

イケガミ ツツミや——あんた大人しいしとってや

エイジ ああ

エイジ、部屋の隅にボンヤリ座った。

イケガミ、ドアを開けた。ツツミが現れた。

ツツミ ごめん 遅なつたわ——

イケガミ ううん ウチもいまご飯食べ終わったとこやねん——ツツミも良かったら食べへん？お茶漬け

しか出来へんけど

ツツミ ありがとう 構へんわ NCPGのバックデータ整理しながらハンバーガー食べてきたから

イケガミ そうか

ツツミ なんかなア ああいう新薬って患者さんに勧めるの億劫やなア

イケガミ タザワさんかいな あの人もうそろそろ落ちるん違うの

ツツミ 落ちるて—— 変な云い方せんといてよ まるでウチが詐欺師みたいやないの

イケガミ そやかてそれがツツミの仕事やない 治験コーディネーターとしての腕の見せ所やん

ツツミ そらそやねんけどな—— 毎日タザワさんと話してたら あんないちかばちかの薬を勧めるのが

イケガミ なんが悪いような氣イしてくんねん

医学の進歩の為や 誰かがやらなあかん仕事や それにNCPGは毒と違うんやで 飽くまで最新

ツツミ の抗がん剤や 胸張って勧めたらええねん

投薬したら百%ガンは消えます いう薬やったら 胸も張れるんやけどな—— ああウチも看護

婦しとった方が良かったなア

イケガミ 何云うてんの ええ給料貰ろてんねんやろ

ツツミ 大した事あるかいな—— ウチも結婚してダンナに食わせて貰いたいわ 先のこと考えたらマ

ンション買うんかって清水の舞台から飛び降りたような氣持ちやで

イケガミ そや 早よせんと銀行閉まってまうで—— あんな大金 キャッシュコーナーで降ろされへんし

ツツミ ホンマやな—— あ家に印鑑置いてきてしもた

イケガミ アホやなア

ツツミ 先行つといて ウチもすぐに追いかけるさかい な

イケガミ 早よしいや

ツツミ 大丈夫 間に合う間に合う

ツツミ、小走りに去った。

イケガミ、用意をして出かけようと、

イケガミ (ふと) あんた――

部屋を見回したが、いつの間にかエイジが居なくなっていた。イケガミ、ため息をついて部屋を出た。

ゴウが現れた。

◆ Act 4

ゴウ こんにちは――

返事が無い。

ゴウ こんにちは―― なんや誰も居れへんのかいな

ゴウ、部屋の中に入り込んだ。

冷蔵庫からビールを出し、コントローラーでテレビをつけた。

ゴウ、テレビを見ながらビールを飲む。漫才の掛け合いがテレビから聞こえる。

ゴウ、面白くなさそうに漫才を眺めている。

イシイが現れた。

イシイ —— (ゴウが居るのに気が付いた)

ゴウ あ お帰り

イシイ 何や あんた —— 何しに来てん

ゴウ 何しに来てんてなんやねん —— ここ俺の家やないか

イシイ 何を都合のええ事云うてんよ (ビールを取り上げた) 他人のビール 勝手に飲んでからに

(テレビも消した)

ゴウ ちゃんと毎月の金 渡しててるやないか ビールぐらいケチケチすな

イシイ 何しにきたんや

ゴウ 子供らに会いに来たんや 映画でも連れてつたる思てな

イシイ ふうん そら残念やったな マサルらオバアちゃんと一緒にUSJ遊びに行ったわ

ゴウ なんじゃそら マサルらと約束しとつたんやで 今度の日曜 映画行こて

イシイ 知らんわ そんな事(ビールを飲む)

ゴウ あいつらも楽しみにしてて云うとつたのに おかしいやないか —— まさか お前 俺を子供らに会わさんように 仕組んだんと違うやろな

イシイ あんたなア 私の居らん時に子供らに電話すんの もう止めてくれへん?

ゴウ 父親として当然の欲求やろが 子供の声聞きたい思うんは

イシイ フン 自分から家出て行つたくせによう云うなア(ビール飲む)

ゴウ 世界中でゆいいつ愛せるんは自分の子供だけや お前も人の親やったら それぐらい判るやろ
イシイ 親失格のあんたに云われたないわ —— そんなに子供が好きやねんやったら あんたがマサルら

引き取ったらどうやの

ゴウ そら無理や 俺にその気があっても レイコが許してくれへん あいつ癩癩持ちやからなア マサ

ルのマの字出ただけで俺に灰皿投げてきよるんや カンニンして欲しいわ

もう帰ってよ

そんなツレナイ事云うなよ せっかく久し振りで顔見たのに(手を握ろうと)

(払って) 触らんとって

ゴウ お前 俺の口つけたビール飲んでるやないか それって間接キスやろ どうや たまには本物の

キスでも (口を突き出した)

イシイ (その顔にビールを掛けた) 止め 気色悪い

わ 何すんねん 目に入ったやないか

ゴウ

イシイ、筆筒の中から「離婚届」を出した。

イシイ (つきつけて) これ サインしてよ

ゴウ 何やこれ?

イシイ 「離婚届け」や

ゴウ お前 何もいまさらそんなもん ——

イシイ サインして (さらにつきつけた)

(受け取った) —— (まじまじと「離婚届」を眺めた)

ゴウ サインだけしたらええ 後は全部ウチがやるから レイコたら云う女にもそう云うとって あんた

なんかノシつけてあげるからもう陰険な電話なんかせんとして

ゴウ 本気か ——?

イシイ 当たり前や

ゴウ —— ちょっと考えさせてくれ

イシイ あんたが今更何を考える事があるんや せいせいするやろ これであんたも

ゴウ これサインしたら 子供にもう会えんのか

イシイ 知らん

ゴウ —— 俺もういつぺん 子供らとお前の作ったご飯食べたかってん ——

イシイ 何を今更 ——

ゴウ お前 後悔せえへんのか 俺がこれにサインしても

イシイ せえへん

ゴウ 俺はなんか —— 後悔しそつや

イシイ (ボールペンと実印を出した) ペンとあんたの実印や

ゴウ —— 俺 レイコと別れよ 思てんねん

イシイ そんなんあんたの勝手や

ゴウ もういつぺんやり直されへんやろか

イシイ 無理

ゴウ もう浮気せえへんけどなア

イシイ 無理

ゴウ どうしてもか

イシイ 無理 —— 早よ書いてしまえ

ゴウ、渋々サインした。

イシイ
ここにハンコ

ゴウ、ハンコを押した。
イシイ、その「離婚届」をすばやく筆筒に仕舞った。

イシイ
はい、これでお終いや—— もう帰ってもええで

ゴウ
帰ってもええでで—— 俺 今日子供らと映画観に行こて思てただけやのに—— なんて離婚届

イシイ
にサインせなあかんねん
身から出た錆びやろ

ゴウ
マサルら寂しがれへんかなア？お父ちゃんとお母ちゃんが離婚したて云うたら

イシイ
なんとも思とらへんわ マサルなんか「お母ちゃん 売れるうちに早よ再婚しいや」て云うとるわ

ゴウ
マサルそんな事云うんか—— そうか（シヨックだ）

ゴウ、持ってきた紙袋をイシイに渡した。

ゴウ
これ マサルとヒロミとキミに渡しとってくれ

イシイ
なんや これ？

ゴウ
運動靴や 駅前でバーゲンやってたから買って来たんや

イシイ
そうか—— 喜ぶわ きつと

ゴウ
ほな 俺 帰るわ（行こつと）

イシイ
—— あんた

ゴウ
なんや？

イシイ ホンマにあの女と別れる気イか？

ゴウ なんてや？

イシイ あんたの女ウチに無言電話して来よるんや 毎日何回も何回も

ゴウ レイコが？まさか——

イシイ ホンマや 云うたら悪いけど 最低や どんな女と付き合おうてもあんたの勝手やけど 離婚届も

書いたんやし もうあんな真似せんよう よう云うといて

ゴウ あいつがなア—— まあ聞いてみるわ

イシイ ホンマに別れるつもりやったら 氣いつけや 嫉妬深い女は怖いで

ゴウ レイコが包丁持って追いかけてきたらかくもうてくれるか？

イシイ その時は他^よ所^そ当たって

ゴウ そやな—— そうするわ

ゴウ、去った。

イシイ、紙袋から子供用の運動靴を三足引っ張り出した。箱にも入っていないバーゲン品である。靴底のサイズを読んで、

イシイ —— アホ 子供の靴のサイズも知らんと こんな物買うて ——

イシイ、しばらく靴を眺めていたが、紙袋に戻し、それを持って玄関を出た。

車椅子に乗った。パジャマ姿のミチロウと、車椅子を押しツツミが現れた。

ミチロウ ちよつと止めてください

ツツミ (止めて) どうしました? 気分悪いですか?

ミチロウ いや あそこに咲いてる白木蓮の花がな

ツツミ (見て) ああ あの白木蓮の木—— ホンマやなア 綺麗に咲いてるわ—— 行つてみましょ

か?

ミチロウ いや ここから眺めてるだけで充分や

ツツミ そうですか?

ミチロウ 白木蓮の花はな 近くで見ると大きいんや 木に咲く花と思えんぐらい不自然に大きいんや 俺は

あれを近くで見るのが怖い

ツツミ そうですか

ミチロウ なんかこう 得体の知れん生命を感じてしまふんや 木の枝からあんな大きな花がいきなり生えと

るいうんは空恐ろしい気持ちができるんや

ツツミ そんなことありませんよ 木蓮の花はええもんです 近くで見ても清々しいですよ

俺の病室から あの白木蓮の木がよう見えよる 夜中にな なんか淋しい鳴き声がして ふと窓の外に目をやると暗い中庭にあの白木蓮の木がぼんやりと浮かんでるんや 目を凝らして見るとその白木蓮の枝振りの中に一羽の小さな鳥が止まっとる—— そいつが水笛でも吹くみたいにヒョロヒョロ鳴きよるんや

ツツミ 夜中に鳥が?

ミチロウ そやねん—— あんな鳥見た事あれへん

ツツミ フクロウと違ふわなア?

ミチロウ 小鳥や なんていう鳥やろ —— そいつの黒い影が白木蓮の花の間に見え隠れしよる —— そや

ツツミ 小鳥いうよりも小さな黒い影や そいつがヒヨロヒヨロ鳴きながら白木蓮の花びらを食べよるんや
それはきつと花の蜜を吸うてるんやわ あの病室からは遠すぎて そう見えるんやわ

ミチロウ そうかなア？俺には花びらを食べてるようにしか思えんけどなア ——

ツツミ 夜中に鳴きながら花びらを食べる鳥なんか聞いた事ありませんわ

ミチロウ そやなア —— しかし あの鳴き声はたまらんくらいに淋しい ——

ツツミ 今晚も来るかしら

ミチロウ きつと来るやろ

ツツミ 私も見てみよう その鳥 ——

ミチロウ —— ツツミさん ——

ツツミ なんです？

ミチロウ 云うてた薬 —— あれ ホンマに効くやろか？

ツツミ NCPG？

ミチロウ どうせ先が無いんやったら 使こてもええかなア思て

ツツミ 云うてたように五分五分です それに副作用は絶対あります もうベッドから離れられんようにな

ります こうやって散歩出来へんようになるんです —— 判ってますか？

ミチロウ ズバズバ云うなア —— それでも手術したって生きてられるか判れへんのやろ？もし成功しても

膀胱は取らないかん訳や —— わき腹から管通して 小便垂れ流さなならん云う事や

ツツミ そうです —— どっちにしてもつらい苦しい事です —— でもNCPGを投薬したとして タザ

ワさんの腎臓にかかる副作用はもしかしたら他人^トよりも軽いものかも知れません もしくは重いものかも知れません ヒトによってはNCPGの抗癌作用がまったく現れず副作用だけが起こる可能

性もあります

ミチロウ それでも癌が消えた人も居る訳やろ

ツツミ 二十五パーセントです

ミチロウ 四分の一や 四分の一やったら賭けてみてもええやろ

ツツミ もっと考える時間はありますよ

ミチロウ あのなツツミさん 夜中に下腹が張ってな トイレに立つやん その時に出るハズのもんが出えへん云うのは あんなに恐ろしいものはあれへん 体の中に風船があつてその中にどんどん水が溜まつてゆくんや 風船が膨らんでゆきよる 体の中の風船が水いっぱい溜めてどんどん膨らんでゆきよる 俺が破裂しそうなんや 判るか ツツミさん

ツツミ

ミチロウ 俺にはもう時間がないんや その薬使うよう 先生に云うてくれ

ツツミ 判りました 先生に云うてみます

ミチロウ —— それでな

ツツミ なんです？

ミチロウ もしその薬が効かへんかった時にな —— (云い漱んだ)

ツツミ なんです？

ミチロウ なんか楽に死ねる薬使こて 俺の事殺してくれへんやろか？

ツツミ アホな事云わんとつてください！

ミチロウ 御免御免 今のは嘘や

ツツミ 云うてええ事と悪い事があります

ミチロウ 悪かった 聞き流してくれ

ツツミ ホンマにもう 今度云うたら 散歩に連れて来ませんからね

ミチロウ そら酷いわ ツツミさんとの散歩が 俺のたった一つの楽しみやのに

ヨシダが現れた。

ヨシダ あらタザワさん お散歩ですか？

ミチロウ あヨシダさん 俺ツツミさん怒らせてしもたんや なんとかしてえな

ヨシダ またタザワさん ツツミにセクハラ発言でもしはったんでしょ

ツツミ そやねん タザワさん めっちゃスケベやねんから もう散歩連れて来たれへんて云うとってん

ヨシダ そらタザワさんが悪いわ 明日から面会謝絶にして病室から出さんようにせんといかんなア

ミチロウ あんたら二人して 癌の患者いたぶって そんなに面白いか

二人 面白い 面白い

ミチロウ クソウ 先生に云いつけたるからな

ヨシダ その前に タザワさんに睡眠薬いっぱい注射して 口聞けんようにしたるわ

ミチロウ オソロシイ こんな病院入院した俺が間違いやった

三人、笑った。

ミチロウ (笑ったのがイケなかったのか、片腹おさえた)イタイイタイタ——

ヨシダ ほらほら 病人は病室で大人しい寝てんといかんがな

ミチロウ 大きなお世話や ツツミさんもう帰ろ

ツツミ はいはい(ヨシダに)ほなヨシダ また後でな——

ヨシダ うん タザワさんお大事に——

ミチロウ　　この病院おつたら　よけい体悪なるわ（まだ片腹をさすっている）

ミチロウとツツミ去った。

ヨシダ、休憩室に入った。イケガミがすでに居り、お茶を飲んでいた。

◆ Act 6

ヨシダ　　あ　イケガミ居ったん

イケガミ　あ　お茶飲む？

ヨシダ　　うん

イケガミ　（茶碗にお茶を淹れて）

ヨシダ　　ありがとう（飲んで）　ああ美味しい——　イケガミ　ちよつと肩揉んでくれへん？今朝から凝って³

凝って

イケガミ　ええよ——　（背後に回って揉む）ここらへん？

ヨシダ　　左の方重点的に——

イケガミ　　ここ？

ヨシダ　　そこそこ　ああ　めっちゃ気持ちエエわ

イケガミ　　——　あのなヨシダ

ヨシダ　　なに？

イケガミ　　ヨシダって幽霊信じる？

ヨシダ　　そやなア　テレビとかで見んのは結構好きやけどなア——　なんで？イケガミ信じてんの？

イケガミ　　信じてるゆうかな——　居んねん

ヨシダ 居るって 幽霊が？

イケガミ うん

ヨシダ 何処によ？

イケガミ ウチとここに――

ヨシダ イケガミとここに？なんで？

イケガミ 知らんけど―― 居んねん

ヨシダ (笑って) まさかエイジの幽霊と違うやろなア？

イケガミ (揉むのを止めて、うなづいた)

ヨシダ 止めてよイケガミ なんでそんな冗談云うてんのよ

イケガミ ―― 誰にも云わんとしてな 笑われるさかい

ヨシダ ウチかて笑うわ―― なんやそれ エイジの幽霊やて

イケガミ ホンマやねん まるで普通に生きてるみたいに「鹿の肉食いたい」「鹿の肉食いたい」て話し掛けてき

よんねん

アホクサ―― あんた それ夢見てうなされてるんやろ

イケガミ そんなと違うねん ウチがご飯食べてる時とかに出てきて 話し掛けよんねん

ヨシダ あんたそれ 精神科の先生に診てもらた方がええで

イケガミ 誰かてそう思うわなア―― そやけどウチには姿もはっきり見えるし ちゃんと会話もしてるし

ヨシダ ふうん

イケガミ

ヨシダ

生きとつた時そのままやねん ウチも喋ってる間はある時が死んでる事忘れてしまう時があるねん
そら重症やで―― つまりイケガミはあの部屋で御飯食べながら ずうっと独り言云うてる訳や
傍で見たら気色悪いわ きっと

イケガミ 今ウチ睡眠薬飲まんと夜寝られへんねん エイジがな 「寒い 俺も布団の中に入れてくれ」て枕元に立ちよんねん

ヨシダ 怖わ

イケガミ 怖い事あれへん うるさいだけやねんけどな

ヨシダ マンション買うて良かったなア—— あんな所にいつまでも住んどるから イケガミの神経がやられてしまふんよ 引越したら きつと治るわ

イケガミ そやったらええけど—— エイジのアホが「引越したら俺もついてゆく」云うとるねん

ヨシダ そらあかんわ 絶望的や イケガミあんた早よカウンセリング受け

イケガミ そうかなア——

ヨシダ アユタ先生に云うといたるわ あの先生やったら評判もエエし ウチ結構仲エエから

イケガミ ヨシダがそう云うんやったら 一遍受けてみよかなア——

ヨシダ そうしい そうしい なんも恥ずかしい事なんかあらへん 看護婦にはようある話や この仕事は

神経がやられやすいんよ—— あ そやけどイケガミ エイジを樂にしたった話だけは絶対にせんといてよ

イケガミ そら判ってるけど——

ヨシダ もうなんもかんも片が付いたんやから イケガミもこれから人生をエンジョイせな もっと気を大きいに持って デエンとしたりええねん そしたらエイジの幽霊かて逃げていきよるわ

イケガミ そうやな ヨシダの云う通りやわ それはそうと どうやのん？イシイとこのゴウちゃん

ああ ゴウちゃんなア—— 私もアホな男に金貸してもうたわ

イケガミ エイジも酷かったけど ゴウちゃんも相当やねんやろ

ヨシダ あいつなア 一つ電話してもノラクラ話避けよんねん

イケガミ ヨシダも氣イ良すぎるわ あんたのダンナの保険金やで ゴウちゃんそれ知ってて借りに来るんや

ヨシダ もんなア ずるい男やで イシイにも話したほうがエエんと違うの
そやけどゴウちゃんといシイくっつけたんウチやしなア——今さらやけどイシイには悪い事し
たなア思てんねん

イケガミ それとこれとは話が別やん お金の話はきっちりとしたほうがエエで ウチからイシイに云う
てみたるか？

ヨシダ そやなア

イケガミ これから皆で同じマンション入居^{はい}んねんし ギクシャクすんのもアレやろ

ヨシダ なんかきづつないなア

イシイとツツミが現れた。

イシイ ちよつとちよつと タザワさんがな NCPGの投票決めはってんて

ヨシダ え ホンマ？

ツツミ ホンマや さつきヨシダにも云いたかってんけど 本人の居る前やったしな

ヨシダ やったやんツツミ さすが治験コーディネーターや

ツツミ そやけど なんか気が重いわ 効けへんかった時の事を考えたらなア——

イシイ 手術^{オペ}したってほとんど絶望やて云われてはったんやもん NCPGの方がまだ光明あるて——

娘さんの承諾かてもう貰てんねんし

ツツミ ウチ タザワさんには元気でこの病院出てもらいたいねん

ヨシダ そやなア ツツミはずつとタザワさんに付きつきりやもんなア

イケガミ イシイ ちょっと——

イシイ なに？

ヨシダ イケガミ ええねん

イケガミ そやかて

ヨシダ ええねんて その話は

イシイ 何やのん？何の話？

ヨシダ なんもあれへん 四人で新築のマンション入るのワクワクすんなア云うとってん

イシイ (イケガミに)ホンマ？

イケガミ 知らん

ヨシダ そらそうと イシイ—— どや例のイタ電 もう掛かってけえへんやろ？

イシイ そやねん ヨシダに相談した次の日から パツタリ止んでん

ツツミ なんやのイタ電て？

イシイ 無言電話 毎日毎日三十回ぐらい鳴らしてきよんねん それがヨシダに相談したら 嘘みたいに無
くなつたんや

ツツミ ああ 例の先生か

イシイ ツツミ知ってるん？

ツツミ 私も世話なつたことあるねん いっぺんだけ

イシイ そう 頼もしい先生やなア

ツツミ せやけど あの先生 高いねんで

イシイ え？

ヨシダ ツツミ いらん事云わんでええねん

ツツミ あ ごめん

イシイ あ そうか—— そらそうやなア タダで解決してくれる訳あらへんわ ごめん ヨシダ ウチ
そんな事ちよつとも氣イ廻れへんかったわ

ヨシダ ええねんで ウチが勝手にした事やねんから 氣イ使わんとつて

イシイ そんな訳にいかんわ 手付の百万まで貸してもらったのに—— なんぼ掛かったん？ウチちゃんと
払うから

ヨシダ ええて イシイ

イシイ あかんあかん—— こんな事はきつちりしとかんと ウチらこれから同じマンション住むのに
ウチ ヨシダに合わす顔あれへんやん

イケガミ そやヨシダ こういう事はきつちりしとかなあかんて イシイかてきつくないやん なア

イシイ なんぼ掛かったん なアヨシダ云うてよ

ヨシダ ツツミ なんとかしてえな

ツツミ ヨシダ あんたその性格直さなあかんて—— あんたが良かれと思つても ヒトはそれで傷つ
くんや なんぼ掛かったか ちゃんとイシイに云うたり

ヨシダ —— 云うだけやで 別にウチ イシイに払ってもらおなんて思てないからな
なんぼやったん？

ヨシダ 三十万 ——

イシイ 三十万 —— ヨシダ あんたウチの為に三十万も払ろたんかいな

ヨシダ —— そやから云いたなかつてん

イシイ 云いたなかつてんやないわ アホ あんた自分のお金なんや思てんのよ—— 幾らウチらが友達

ヨシダ 同士やからて やつてエ工事と悪い事があるわ

イシイ ごめんてイシイ そない怒らんとつて

ヨシダ どのいしょ 三十万も —— ウチどないしたらええのよ

ツツミ しょうないやんイシイ ヨシダかて良かれと思てやったことやねんし—— 今回はヨシダに甘えとき

ヨシダ そうして お願ひ イシイ

イシイ あかん ウチ払う そら一遍に全部云うわけにはいかへんけど ちやんと払うから—— ヨシダはゴウのことでウチに負い目が有るように思てるかも知らんけど そんな事ヨシダとは全然関係あれへんねん ゴウとウチがこうなつてしもたのは ウチら二人だけの問題や あんまり変な氣イ回さんとつて—— 判るやろヨシダ？

ヨシダ 判つてるねんけどな——

イケガミ いいや 判つてへんヨシダは—— ヨシダのダンナ きつと天国で泣いとるわ あんたと子供の為に残した保険金を ポンポンヒトにあげたり 貸したり 金銭感覚いうもんがヨシダにはあらへんのや

ツツミ そら云えてる ヨシダが良かれと思つても それは結局ヒトの為になつてへんねんて—— 29 イ

イシイ イケガミとこが？—— どないしたん？

ヨシダ なんもあれへん

イケガミ エイジのアホが ヨシダから金借りとつたんや

ヨシダ 止めてや イケガミ

イケガミ いいや止めへん—— エイジのアホが ヨシダが気がエエのに付け込んでチヨコチヨコ 金借りとつたんや ヨシダも云うてくれとつたら良かったのに ウチが知つた時にはもう千五百万もヨシダの金に手えつけとつてん

イシイ 千五百万—— なんでよヨシダ そんな大金なんで貸すんよ

ヨシダ 一遍に貸した訳やあらへんねん ちょこちょこつてな 貸してたら いつのまにかそんだけになつ

ててん イケガミのダンナやから断るわけにもいかへんしなア

イシイ それにしたって 非常識やわ—— 千五百万もの大金 どないすんどのよ

ヨシダ その話はもうエエねん 済んだ事やし

イシイ 済んだ事て—— イケガミ あんたのダンナて 二年前に亡くなつたんやろ？

イケガミ そうや

イシイ ヨシダにいつこも借金返さんと？

イケガミ 借金は返してくれたわ

イシイ どうやって？

イケガミ 保険金に決まつてるやないの—— それ以外にエイジに借金返せる能力あると思う？

イシイ まさか そんな事—— ホンマなん？

ツツミ ウチが云うのもなんやけど 自業自得やと思うわ それしか返す方法あれへんかったやろなア——

—— イケガミには気の毒やけど

イケガミ ええんよ あんな奴の保険金なんか あいつは人間のクズやってんから 仕方ないわ—— 生ま

れてけえへんかったら良かってん エイジなんか

イシイ 知らんかったわ そんな話

ツツミ 当たり前や ウチら三人だけの秘密やねんから

イシイ そら あんまりヒトに云える話や無いわなア

イケガミ イシイもヒト事違うで

イシイ え 何？

ヨシダ イケガミ そろそろ戻らんと 配膳の時間やで(立つ)

イケガミ あ ホンマやな(も立った)

イシイ ちよっと待ってよ イケガミ 他人事違うてどういふ事よ

イケガミ
イシイも早よおいでや 患者さんは待ってくれへんで

ヨシダとイケガミ、去った。

ツツミ
イシイ
イシイ

何？

あんたゴウちゃんと話してるか？

何の話よ

ゴウちゃんもヨシダに借金してるらしいで

嘘やん

今度ゴウちゃんに会うたらよう聞いてみたらエエわ（行こうと）

嘘や そんなん —— なんてゴウがヨシダに借金なんか ——

とにかく 早よ手え打たんと ヨシダが可哀想やで —— ヨシダ見栄っ張りやから羽振り良さそ

うに見えるけど 時々人の居らん所で溜息ついてるわ

なんでウチに云うてくれへんのよ おかしいやん そんなアホな話ないわ

それがヨシダの悪い性格やな —— ウチも日頃から云うてんねんけど あれは死んでも治らんわ

なんぼくらい借りてんねやろ？

さあな —— イシイ 行くで

ツツミ
イシイ
イシイ
—— うん

ツツミとイシイ、去った。

ヒデキが現れた。

獵銃を手に、見えない鹿を追いまわしている。

◆ Act 7

ヒデキ

何故人は狩にこうも心を躍らせるのか？血沸き肉踊るこの興奮 思わずタップダンスを踏んでしま
うじゃないか（踏む）アメリカ人では無いけれど こうして銃を構えれば イラクを攻撃したい気
持ちが良く判るんだ 正義もクソもあるもんか 只々腹の底から血がたぎるんだ ないがしろにし
たいんだ 踏みにじりたいんだ 欲望を解き放ちたいんだ 死すべきものに死をあたえたもうよう
神は采配されたのだ 僕はそれを知っているんだエイジ君 君と二人で夜陰に紛れて春日大社を走
ったよね あの素晴らしい夜の息遣いを僕は生涯忘れやしないんだ 「まるでスローモーションの
ようだ」と君は鹿の倒れ行く様を美しく語ったつけ そして何よりものクライマックスは 人里離
れた鴨川の源流で行われた鹿の解体作業だった 裂いた腹から内臓がデロレンと出て湯気がもうも
うと立ち上る様（おかし）に思わず息を呑んだんだ あれはまさに格闘技だったね 鹿と人間の格闘技 血ま
みれの汗まみれで半日もかかって 小分けした肉をサラップで包んだ後に二人でスッポンポン
になって川で水浴びしたよね よもや今となっては全てが美しい思い出であるのだけれどエイジ君
君には悪いが僕はあの興奮を今も持続しつづけているんだ

ヒデキ、パンと獵銃を撃った。

ヨシダが走って現れてヒデキの頭を殴った。

ヨシダ

アホ 人の家で何獵銃撃つとんねん

ヒデキ
ヨシダ

空砲やん 空砲
隣の人ビツクリするやないの

隣の人が現れた。

隣の人

ヨシダさん なんですよ今の音？！

ヨシダ

いやア済んません —— この人がちよつとフザケてしもたんですわ

隣の人

(ビツクリして) そ それホンマもんですの？！

ヒデキ

(胸を張って) ホンマもんです

ヨシダ

(殴って) アホ！ —— ホンマに済みません この人狩りが趣味なんですわ ちゃんと免許も持

隣の人

てるんです もう二度とさせませんから許したってください
人騒がせなことせんとってな！

隣の人、去った。

ヨシダ

みてみ おこられたやないの

ヒデキ

なんじゃい 鉄砲の音くらいでギャアギャア騒ぎやがって 撃ち殺しに行つたらか(行こうと)

ヨシダ

アホな事せんとって(殴った)

ヒデキ

冗談やん 冗談 —— 僕の頭ぼんぼん殴るのやめてえな

ヨシダ

あんまり軽率な事したら縁切るからな

ヒデキ

ちよつと興奮しただけやん 明日は久し振りの鹿撃ちやからな

ヨシダ

エエ加減にしとかなそのうち手エ回るで

ヒデキ 大丈夫や サイレンサーもちゃんとつけとるさかい 今みたいな音はでえへんねん プシユ云うたら

ら終わりや

ヨシダ 云うとくけどウチは行けへんからな

ヒデキ 騙された思て 一遍おいでて —— 鹿に弾当たった時の快感いうたら そらたまらんもんやで

ジーンて下半身が痺れるんや 猪も面白いけど倒れ方が今ひとつやねん ドテッコロツて なんか無様や そこへ行くと鹿の倒れ方にはなんと云えん気品があるねんな 柳がしなるみたいにシユインバッタンて倒れよんねん シユインバッタン（とやってみる）な 判るやろ？

ヨシダ いたいけな動物殺す奴 ウチ嫌いや

エイジ なに云うてんねん 狩猟は人間の本能やぞ どんな動物かて何かを殺して生きとるんや 食物連鎖

ヨシダ 云うやつや ヨシダお前 スーパーで売ってる豚コマが豚コマの姿形で生まれてくるとしてんのか

スーパで買えるもんをなんでわざわざ殺しにいかなあかんねん

春日大社の鹿はスーパーで買えません

屁理屈云わんでええねん そんな残酷な事 ウチはしたないんや

撃った鹿担ぐの一人では大変なんや 解体すんのかて難儀やし

誰か他の人探して

エイジ君が生きとったらなア あいつ鹿の肉に目が無いし 喜んで行きよるんやけどなア ——

しゃあない 親鹿はあきらめてバンビちゃん狙おか バンビちゃんやったら 俺一人でも充分や

もう止めて そんな話 吐き気がするわ

何云うてんねん 人殺しが —— 人間やったら殺してもようて 鹿やったらあかんのか？そんな

理屈聞いた事無いわ

ヨシダ 人聞きの悪い事云わんとって あれは人助けや

ヒデキ 確かにな エイジ君はロクな奴と違うかった 死んだ方が世の為人の為や せやけどヨシダ その

ロクでも無い奴の保険金をごっそり猫ババしてるお前は何や？お前の方がエイジ君よりもつとタチの悪いハイエナ違うんか

ヨシダ そのハイエナから分け前貰てるヒデキはさしずめダニやな
ヒデキ なんやと

ヨシダ 世の中は不公平に出来てんねん 病院の中居ったら判るわ ウチらがなんぼ一生懸命看護しても死んでしまう人は死んでしまうんや それがどんなに若うても エエ人でも命が絶たれてしまうんや 逆にエイジとかゴウちゃんとかヒデキみたいな死んだ方がエエ奴がのうのと生きとる ウチらには手の施し様があらへん 世の中不公平や

ヒデキ ヨシダ —— まさかお前 僕の事も ——

あんたがウチの為に保険入ってくれんねんやったら いつでもオーケーやで

アホ云うな 恐ろしい女やで ホンマ(云いながらニヤニヤしてる)

早よ出し 借用書

ヒデキ (出しながら) お前絶対ロクな死に方せえへんからな(借用書の束を渡した)

世の中不公平や云うてるやろ(受け取って調べた)天災は善人にも悪人にも平等に降りかかるんや
ウチは未来は信じへん 今 手に掴めるもんだだけが真実や

—— どや よう出来てるやろ

ヒデキ おおきに助かるわ(借用書の束をバックにしまった)

ヨシダ 小学生の頃から 図画工作だけは得意やったからな チヨロイもんや

頼りにしてんで 先生

ヒデキ おっと —— 僕が立ち入るんはここまでや 図画工作とイタ電くらいはお手のもんやが ここか

ら先は手に負えません 僕には鹿撃ちくらいがちょうど合うてるわ 今度バンビちゃんの肉持ってきたるわな

ヨシダ
ヒデキ
ウチはそんなもんいらん イケガミとこ持って行って エイジの仏壇にでも供えたつたらエエねん
アホ 死人に鹿の肉が食える訳あらへんやろ

ヨシダ
ヒデキ
冷たい奴やなア あんたら友達同士やったんと違うの
お前の受け持ちの病室で一緒やっただけや ただ四回程鹿撃ちつれて行ったつただけや 友達やあ
るかい お前もそうやろ イケガミが友達やたらあんな恐ろしい事出来へんやろ

ヨシダ
ヒデキ
（怒った）何云うてるねん ウチとイケガミは友達や 変な事云わんといて
そっちこそ 何云うてるねん イケガミだまして保険金せしめとるやないか

ヨシダ
ヒデキ
金と友情は別物や ウチはイケガミがいつまでもエイジに泣かされとるんが耐えられへんかったん
や イケガミの事思て騙したつたんや そらお金が欲しかったんも事実や そやけどイケガミがか
けがえの無い友達や云うんも事実や 騙しつづける友情かてあるんや

ヒデキ
ヨシダ
お前の云うてる事よう判らへん

ヨシダ
お前らがあんまり不甲斐無さ過ぎるんじや 女泣かすだけしか能のあらへんボケばかり揃いやが
つて 何が鹿撃ちじや そんなんしてる暇あつたら一生懸命働いて 嫁さんに家建てたらんかい
ダイヤの指輪買うたらんかい 毛皮のコート買うたらんかい 家族連れて海外旅行行つたらんかい
この甲斐性無しらが

ヒデキ
ヨシダ
おい待てヨシダ 僕なんも関係あらへんやん もっとビジネスライクに行こうや

看護婦の仕事は何よりも人に対する献身や 看護学校の三年間でみっちり身につけさせられるんや
病院いう狭い世界の中で 世間知らずのお嬢ちゃんを純粹培養されたままで干からびてしまう事も
ままにあるんや 云うたら乙女の干物や —— あの娘ら見てたらイライラすんねん 苛めて苛め
て苛め抜いたらんと氣イ済めへん 自分が幸福に生きる云う事がどういいう事か 骨身に染みて解ら
したるんや それがウチの友情や

ヒデキ
何を解らしたんのか 高い授業料払わされてなア（ワラッている）

エイジが、すでに現れていた。したたかに酔ってテーブルに突っ伏している。それを、冷酷な目で見ながら、ヨシダとヒデキが去った。ツツミとイケガミが現れた。

◆ Act 8

ツツミ 後悔せえへんな イケガミ？もう後には引かれへんで
イケガミ (深くうなづいて) —— 判ってる これでウチも救われるんや
ツツミ 電話するで ヨシダに
イケガミ うん

ツツミとイケガミ、二人掛りでエイジをテーブルに載せた。
ツツミ、携帯電話を取り出し、ボタンを押した。
ヨシダ、応答した。

ヨシダ もしもし
ツツミ ヨシダ 今寝よったわ
ヨシダ そうか そしたらさっそく作戦実行や 手筈通りやで
ツツミ 判ってる
ヨシダ 電話切ったらあかんで ウチここで聞いているから

ツツミ 判った —— イケガミ やるで
イケガミ うん

ツツミ、持っていた紙袋の中から、注射器、血圧計、カリウムのアンプル、
駆血帯を取り出し、テーブルに並べた。
イケガミ、エイジの靴下を脱がせ、胸をはだけさせた。

ツツミ イケガミ 駆血帯巻いて
イケガミ 判った ——

イケガミ、駆血帯を取ってエイジの足首に巻いた。
ツツミはその間に、エイジの腕を捲り上げ、血圧計の圧迫布を巻いた。

ツツミ 巻いたか イケガミ
イケガミ うん
ツツミ そしたらカリウムや
イケガミ 判った ——

イケガミ、カリウムのアンプルを切って、注射器で吸い上げようとするが、
手が震えて上手く出来ない。

ツツミ 早よしい イケガミ

イケガミ あかんツツミ 手が震えてアンプルに注射器シリンジの針が入れへん

ツツミ 貸し ウチがやったげるわ

イケガミ 御免 —— (渡した)

ツツミ、アンプルから手際よく吸い上げた。

ツツミ どうする ウチがポンプしたるか？

イケガミ (首を横に振った) ウチがやる ——

イケガミ、注射器を受け取った。エイジの足の甲に注射針を突き刺そうとするが、
ためらってしまふ。

ツツミ どないしたんイケガミ —— 早よポンプしい

イケガミ この血管でええかな

ツツミ そやな この血管や —— ウチが押さええといたる —— 早よポンプしいイケガミ

イケガミ 判った —— (注射しながらつぶやく) あんたが悪いんや 自業自得や 自分のやった事は自分で
責任取らないかんのや —— アホ死んでまえ

イケガミ、注射をし終えた。

ツツミ、エイジの脈を取ってみた。続いて聴診器を胸に当てた。

ツツミ —— もしもしヨシダ あかんわ カリウム ポンプしてもバイタル変化あらへん

脈も正常や

ヨシダ タフやなア エイジの心臓は

どないする？

ツツミ 仕様無い エアーいれたるか

ヨシダ エアー？ そんなことしてもしばれたらどうするんよ

ヨシダ 死因はあくまでも急性心不全や 司法解剖にはならんやろ ちよつとぐらいのエアーやったら大丈夫

夫や 牛乳壺一本分ぐらいいれたり

ツツミ 判った —— イケガミ エアーや

イケガミ (エイジの顔を両手で触っていた) エイジ 顔真つ赤や もの凄う熱いわ ——

ツツミ 聞いてんのか イケガミ エアー ポンプするんや

イケガミ エアー？ エイジに空気入れんの？

嫌やったら ウチがやったげる

イケガミ エイジはうちの男や ウチがやる

イケガミ、注射器に空気を吸い上げた。

足の甲に注射器をつき立てようとしたその時、

エイジがかすかにつぶやいた。

エイジ —— 怖いなア ——

イケガミ 大丈夫や 何も怖い事あれへん これ打ったら楽になるからな ——

ツツミ 四回やイケガミ そのシリンジやったら四回入れなあかん

イケガミ 判った ——

イケガミ、空気を注入する度に「一回、二回 ——」と数えた。
エイジの手足が痙攣する。
三回目の空気を注入し終えて、イケガミの手が止まった。

ツツミ 何してるんや イケガミ —— もう一回ポンプや

イケガミ (ツツミの目を見て)最後の一回はツツミがポンプして

ツツミ なんで?

イケガミ なんでもや ポンプして ツツミ

ツツミ —— 判った

ツツミ、注射器を受け取り、イケガミと代わった。

イケガミ、エイジの頭を抱いた。

ツツミ 入れるで

イケガミ (うなづいた)

ツツミ、四回目の空気をエイジに送り込んだ。

エイジの足が大きく痙攣した。やがて動かなくなる。

ツツミ、もう一度血圧を測った。

ツツミ　もしもし　エイジの血圧下がってきた　もうあんまり長ないやろ

ヨシダ　そうか　そしたら早よイケガミに救急車呼ばせるんや　ツツミは道具片付けてすぐにそこ出えや

ツツミ　判ってる　電話切るで

ヨシダ　オーケー　(切る)

ツツミ　イケガミ　119番や　ちゃんと電話掛けられるか？

イケガミ　掛けられる　――

ツツミ　(渡して)　ウチ　ここ片付けて帰るさかいな(片付ける)

イケガミ　うん　――　(電話をじっと見つめた)　ツツミ

ツツミ　なに？

イケガミ　119番て何番やった？

ツツミ　アホ　119番は119番や　イチイチキュウや　しっかりしい

イケガミ　そうか(押して)　――　もしもし　急患お願いします　ウチの人の様子が変なんです　揺す⁴²つて

も起きへんのです　――　そうです　お願いします　はい　名前はイケガミエイジ　はい　住所は

住吉区山之内町一丁目百二十九番地です　はい　至急お願いします(電話を切つて座り込んだ)

ツツミ　イケガミ　ここから正念場やで　あなたの態度に掛かってんねんからな

イケガミ　判ってる　上手い事やるさかい

ツツミ　頼んだで　ウチ帰るさかいな

イケガミ　うん　――　ツツミ

ツツミ　なんや

イケガミ　これでええねんな？

ツツミ　これでええねん　仕方ないやん

イケガミ　仕方ないもんな　――　今日は有難う

ツツミ 楽にしいや イケガミ

ツツミ、去った。
イケガミ、じつとエイジを見た。

イケガミ こうするしかなかったんや エエ気味や アホが ——

イケガミ、そのままテーブルに突っ伏した。
エイジ、起き上がり、イケガミの頭を撫でた。
イケガミ、エイジに抱かれたまま去った。

イシイとゴウが対面して座っていた。

◆ Act 9

イシイ (ゴウの顔を泣きそうな顔で見ている)

ゴウ なんやねん？なにを黙ってんねん？さっきから俺の顔 凝って見つめて
れたら照れるやろ —— さっさと用件云え お前が呼び出したんやろ
—— あんた なんで黙ってたん？

ゴウ 黙ってたん —— て何の事や

イシイ トボケんの止めて
ゴウ 別にトボケてへんて

イシイ あんたの隠し事なんかお見通しやてばっかり思とったけど 今度だけはすっかり騙されてもうたわ

—— あんた どんだけウチを苛めたら気が済むんな

ゴウ お前 いったい何の話の事云うてんねん？ そら数えたら切りが無いほどお前には迷惑掛けたけど

イシイ

この前書いてもろた離婚届 あとは役所に提出したらもう終わりや これでやっとあんたから開放されるて思つとつたのに ——

イシイ、筆筒から離婚届を出し、ビリビリに引き裂いた。

それをクシャクシャに丸めて、ゴウに投げつけた。

イシイ

アホッ！

ゴウ お前の行動よう判れへん —— なんで離婚届破いて俺に投げつけなあかんねん —— それって

新しいヨリの戻し方？

イシイ

誰が離婚なんかしたるか 逃がさへん ヨシダの借金返すまでは

ゴウ

ヨシダの借金 —— え？ お前知ってたん？ アチャア

イシイ

アチャアて何よ 何よその態度は（詰め寄った）

ゴウ

ヨシダ 誰にも云えへんて云うとつたくせに —— あいつお前に喋りよったんか

イシイ

アホッ！ アホアホ なんでヨシダに借金すんのよ あんたなんか死んでまえ

ゴウ

そんなん云うてもアレやん ヨシダなんぼでも貸してくれよんねんもん 催促もせえへんし 街金

イシイ

みたいな利息も無いし「金に困つたらいつでもおいでや」て云うてくれよんねん ——

あんたが街金からなんぼ金借りようが私の知った事と違うけどな ヨシダはウチの友達やねん それも昔から世話になつてる友達や あんたと結婚した時どんだけ走り回つて世話焼いてくれたか あんたも覚えてるやろ

ゴウ —— そんなヤイヤイ云わんでも判ってるがな

イシイ 判ってへんから云うてるんや あんたは寄生虫や ヨシダが人がええからってそれに付け込んで

—— あんたなんか人間失格や

ゴウ そのままで云う事無いやろ 俺傷つくやんけ

イシイ 傷ついたらええねん ウチはあんたの千倍傷ついてるわ —— ヨシダから何ぼ借金してるねん

ちゃんと云うて

ゴウ そんなん急に云われても 憶えてへんわ

イシイ 思い出し 何ぼ借金してんねん？

ゴウ (指折り数えて見たりする) エエと 家に帰ったら借用书あるねんけどな —— 確か —— そうや
なア —— 二百万くらいかな

イシイ この期に及んでまだ嘘つくんか

ゴウ ホンマやて —— はっきりした数字はちゃんと憶えてないけど 確か二百万 —— 三百万には⁴⁵

届いてないやろ ——

イシイ 千八百六十七万

ゴウ へ？

千八百六十七万 —— それがあんたの借りたお金や

ゴウ —— 千八百六十七万 —— 嘘云うな 幾ら俺でもそこまでしよう借りやんわ

イシイ ヨシダの家行つて確かめたんや あんたの借用书がごっそり出て来たわ 計算したら千八百六十七

万 —— ウチに黙って十年も —— ようやってくれたわ

ゴウ それ なんかの間違いや

イシイ どの借用书にもあんたのへたくそなサインが書いてあったわ

ゴウ そやかて そんな大金 —— 俺 一回に十万か 多い時でも二十万くらいしか借りてへんねんで

イシイ そんな借用書が山程出てきたんや あんた一回でもヨシダに返そ思た事あるんか

ゴウ あいつ ダンナの保険金 株に投資してゴツソリもうけてるらしいやん 俺が借りる金なんかヨシ

ダにとつては鼻くそみたいなもんや —— そやから いつでもええかなアて ——

イシイ 一回も返した事無いねんな

ゴウ —— まあな

イシイ あんたがウチに振り込んでるお金 あれもヨシダからの借金か？

ゴウ そういう時もあるな —— そやけど千八百万云う数字は絶対おかしい 俺ちよつとヨシダに電話

するわ（しようつと）

イシイ 止めて 電話なんかせんとして

ゴウ なんでや

イシイ この上 まだ恥の上塗りする気か —— あんたの嘘なんかもうコリゴリや

ゴウ なんやと お前 俺とヨシダの云う事どつち信じるんや

イシイ あんたの云う事信じて ウチがどれだけ泣かされてきたと思てんねん 今さらあんたの云う事信じ

ろ云うほうが無理や

ゴウ こいつウ（殴ろうと）

イシイ 殴つて借金が減るんやったら 何ぼでも殴つたらええ —— せやけど今度はウチとあんたが死ぬ

気で働いて返さんと どうにもなれへんねん そこんとこ解つて 頼むわ あんた鉄工所の職人と

してはエエ腕持つてんねんやろ コツコツ働いて返すしか無いやん ウチ ヨシダにお願いするから

二十一年掛かっても三十年掛かっても必ず返すから待つて お願いするから

アホらしいてやつてられるかい なんで借りても無い金返さならんねん

イシイ あんたが開き直つて済む問題と違ふんや なあ頼むから解つて（すがつた）

ゴウ 離せ けつたくそ悪い —— もう一遍やり直してくれるんか お前が思い直してくれたんか思て

来たら いったい何の話や 俺は知らん こんな家二度と来るか！

ゴウ、去った。

イシイ 待つてよ ウチ一人でどないしたらええんよ ——

電話が鳴った。

イシイ、電話を取った。

イシイ はい

ヨシダ もしもし ウチや ヨシダや

イシイ ヨシダ —— 何？

ヨシダ イシイに云うてもせんないねんけどな ちよつと困った事があんねん

イシイ どないしたん？

ヨシダ ウチが投資してた会社が突然倒産しよつてなア ちよつと困った事態になつてんねん どないしよう
う

イシイ どないしようて —— ヨシダ そんな事ウチに云われても ——

ヨシダ 二千万程 いかれてしもたんや 一流企業やし今までなんとも無かつたところが突然や ウチどない

したらエエねん —— ダンナの保険金全部いかれてしもて ウチ子供らに合わせる顔あらへん

もう死にたいわ

イシイ 死にたいてヨシダ —— ちよつと待つとき ウチすぐ行くから

ヨシダ イシイしかおらへんねん ゴウちゃんに貸して千八百万なんとかなれへんやろか

イシイ そんな事 急に云われても ——

ヨシダ 皆でマンション買おやなんてエエカッコして —— アホやホンマアホや つくづく自分に愛想が尽きるわ

イシイ ウチマンション買うの止める そしたら手付の百万返って来るやろ 当座はそれで凌いで 先の事は相談しよ

ヨシダ アホな事云いな キャンセルしても百万は返ってけえねんへん そう云う仕組みになつとるねん
ウチ一文無しや なあイシイ助けて お願いや

イシイ ウチに出来る事やつたらなんでもする そやけど 千八百万もの大金 —— くない考えても今すぐには無理やわ

ヨシダ 無理を承知で頼んでんねん —— ウチら友達と違うんか イシイ ウチ今まであんたの為に世話焼いて来たつたやん あんたにとつてはいらん世話やつたかも知れんけど ウチは不器用な人間や

さかいああいう形でしか あんたらと付き合われへんかつたんや それはウチも悪かつた思⁴⁸てる
せやけど友情は友情や 云うたらなんやけどイシイ ウチはあんたに一遍も友達らしい事してもう
た事あらへんで

イシイ ヨシダ —— あんた何云うてるん？

ヨシダ こういう時こそ友達甲斐を見せて欲しいねん —— お願いやイシイ ウチの一生に一遍の頼みや
ウチにどうせえ云うんよ

イシイ それは自分で考えて —— イケガミの時も あの娘がよう考えてくれよってん イケガミはウチ
のエエ友達や イシイもウチのエエ友達や そうやろイシイ？あんたしか頼るもんおれへんねん
明日までになんとか考えとつて お願いやでイシイ
ちよつと待ってヨシダ ——

イシイ

電話、切れていた。

イシイ、受話器を置いて佇んだ。

イシイ ——— それってどういう事よ ———

イシイ、頭を抱えて狂人のように叫んだ。

車椅子のミチロウが、ツツミに付き添われて現れた。

◆ Act 10

ミチロウ ♪ ハルノウララノスミダガワ ハルノウララノスミダガワ ハルノウララノスミダガワ ハルノウ

ララノスミダガワ ——— ♪

ツツミ (笑って) タザワさん なんですの その唄

ミチロウ ハルノウララノスミダガワや この歌詞忘れてしもたけど 全部七五調やから ハルノウララノス

ミダガワだけで間に合うんや

ツツミ 横着な唄やなア

ミチロウ 唄は気持ちや 気持ちがこもってたらそれでええんや ——— ツツミさん ちょっと止めて

ツツミ はい (車椅子を止めた)

ミチロウ 手え貸したらあかんで

ツツミ なにするんです?

ミチロウ、車椅子に掴まりながら、ゆっくりと立ち上がった。

ミチロウ (一人で立った)どや？

ツツミ 凄い 立てた立てた

ミチロウ まだこれからや —— ツツミさん 俺に触ったらあかんで

ミチロウ、覚束ない足取りで、ゆっくりと歩いてみた。

ミチロウ どや？

ツツミ やりますやん タザワさん

ミチロウ フッフ やるやる

ツツミ やるやる

ミチロウ、少しよろけた。

ツツミ、素早くそれを受け止めた。

ツツミ そやけど 無理は禁物ですよ

ミチロウ 済まん済まん ありがとう 今日はいくらにしようと

ツツミ、ミチロウを車椅子に座らせた。

ツツミ そやけど素晴らしいわ タザワさん五歩ですよ 五歩も一人で歩けたわ

ミチロウ 五歩か そしたら明日は十歩や 少しづつ増やして行って そのうちツツミさんとデートできるよ

うになるなア

ツツミ　そしたらピクニックに行きましょか　ウチ弁当作ってきますわ

タザワ　うれしい事云うてくれるなア　ホンマやで　約束や

ツツミ　約束です(指切りした)

ミチロウ　やっぱり凄いなア　NCPGの効き目は　見る見る元氣になってゆく氣がするわ

ツツミ　薬だけのせいと違います　タザワさんの氣持ちですわ　自分は治るんやゆう氣持ちが一番の薬な
んやわ

ミチロウ　そうや　唄と一緒にや　氣持ちが大切やねん　そやけどそう云う氣持ちになれるんはNCPGのおか
げや　もっと云うたらNCPGを勧めてくれたツツミさんのおかげや　——(改まって)有難う
ツツミさん

ツツミ　止めてください　そんな改まって有難う云われても　——　まだ投薬ワンクルー終わったとこです
よ　薬の効き目も判ってへんのに

ミチロウ　いいや効いてる　自分の体の事は自分が一番よう判るんや　手術するよりNCPGの方に決めてよ
かった　俺の決断に間違いはなかったんや　——　って　こんな自信をつけてくれたんはやっぱり
ツツミさんのおかげや　有難うツツミさん

ツツミ　そんなに云わはるんやったら　謹んでお受けします　どういたしまして　タザワさん
ミチロウ　宜しい　——

二人、笑った。

ミチロウ　——　白木蓮の花もみんな散ってしても　すっかり春めいたな
ツツミ　タザワさんが云うてはった鳥　見そびれてしまいましたわ

ミチロウ 白木蓮の花を追いかけて 涼しい地方へ移動しよったんやろ —— 俺も最近はぐっすり眠れる
ツツミ ナイチンゲール云うんですて
ミチロウ ナイチンゲール？

ツツミ 図鑑で調べてみたんです 日本名はさよなきどり小夜啼鳥ですわ

ミチロウ ナイチンゲール云うたら 看護婦の神様と同じ名前やん
ツツミ そうですね

ミチロウ あの白木蓮の花びら食べてた黒い鳥がナイチンゲール —— なんかイメージが合わないな
ツツミ ヨーロッパに棲息してる鳥やからタザワさんの見た鳥とは違うかも知れへんけどね
ミチロウ きっと違うで あんなナイチンゲールなんかおれへんわ
ツツミ そうですね きっと

ヨシダとイケガミが深刻そうな面持ちで現れた。

(ツツミとは少し距離がある)

ミチロウ いや そんな事無い —— あいつらがおった 黒いナイチンゲール二人連れ
ツツミ (ブツと吹いた) 云うたら ヨシダとイケガミに

ミチロウ あんな口の悪い看護婦おれへんで

ツツミ ヨシダ イケガミ もう帰るん？

イケガミ (呼んだ) ツツミ ちよっと

ツツミ 済んませんタザワさん

ミチロウ ああ 今の話ナイシヨやで

ツツミ はいはい——(行つて) 何 イケガミ?

イケガミ ヨシダ大変やねん 投資してた会社が潰れてしもてんて

ツツミ ええ! —— ヨシダ あんたなんぼやられたん?

ヨシダ 二千万や —— イケガミに返してもろたお金も全部やられてしもたんや ごめんなイケガミ あ

んな思いまでして返してくれたのに ウチがアホやったわ

イケガミ ツツミ あんたも来て いまからイシイの所いくねん —— あの娘 今日病院休みよつてん

ツツミ ゴウちゃんのお金 取返すんか

イケガミ それしかあれへんやん —— 大丈夫やヨシダ ウチがなんとか説得したるさかい

ツツミ ウチも急いで行くわ 先行つて待つてて

ヨシダ ごめんなツツミ あんたらしかおれへんねん こんな事相談できんのは

ツツミ 解つてる —— 氣いしっかり持ちや

イケガミ ツツミ 出来たら一緒に行こ ヨシダかてそのほうが心強いやろ

ツツミ 解つた —— エデンで待つてて 三十分で行くわ(ミチロウの方へ)

イケガミ 解つた

ヨシダとイケガミ去つた。

ツツミ 濟みません タザワさん ちよつと急用ができてしまいましたん

ミチロウ なんや 深刻そうな顔寄せて —— 悪企みでもしてたんかいな

ツツミ そうですねん ロクデナシ一人殺したる云うてたんですわ

ミチロウ おお怖わ —— それ俺の事と違うやろな

ツツミ 判りませんよ なにせ黒いナイチンゲールですからね

ミチロウ 堪忍して欲しいわ

二人、笑いながら去った。

部屋の椅子に、イシイがぼんやりと座っていた。ヨシダ、ツツミ、イケガミが現れた。イシイを取り囲むように、立って見下ろしている。イシイ、黙って左の薬指の指輪を抜き取り、テーブルの上に置いた。

◆ Act 11

イケガミ なんのつもりやの イシイ

イシイ ウチの持つてる金目のもんゆうたらこれしかあれへん —— 結婚した当時で二十万の指輪や⁵⁴ |

ツツミ それをどないしろいうんよ イシイ

イシイ (首を振った) 解らへん なんぼ考えても 頭の中真っ白になるばかりや ウチ三十六年も生きて

きて こんなもんしか持ち合わせてないねん ごめんやヨシダ

ヨシダ イシイ そんなもんしもといて

ウチが死んだらええんか？ ウチの入ってる保険金は二千万や それをヨシダにあげるしかないんか？ —— 嫌や怖い ヨシダ 十年掛かっても二十年掛かっても ちゃんと返すから 何とかそれまで待つててえな お願いや

ヨシダ、イシイを抱きしめた。

ヨシダ

かわいそうに　こんなに震えて　——　イシイ　ごめんな　ウチも昨日は取り乱してもうて　あんな電話掛けてしもたんや　悪かったわ　かんにんやで

イケガミ

イシイ　とにかく落ち着き　あんた何も悪い事してへんやん

ツツミ

そうやイシイ　あんたが悪いんは男運だけやで

イシイ

ゴウにもちゃんと謝らせる　二人で働いてコツコツ返すから　ヨシダ　何とか待って　な　な

ヨシダ

そうしてあげたいのはやまやまなんや　せやけどウチ　あのマンション買う時　株を担保にして銀行から金借りたんや　キャッシュで買うてしもたんや　——　株がファイになった以上　銀行にマンション取り上げられてしまうんや

イシイ

そんなアホな

ヨシダ

今月中に銀行に金入れな　ウチ破滅や（顔を覆った）

イシイ

ヨシダ　あんたローン組んだて云うてたんと違うん　——　ウチらと一緒に住宅金融公庫申しこん

だんと違うん？

ヨシダ

ウチ一人だけキャッシュやて　あんたらに云うの恥ずかしかったんや　ごめんな　イシイ　こんな事になってしてもて

事になってしてもて

ツツミ

みっともない　ヨシダ　もう泣くの止め　あんたのそんな顔　見たあらへんわ

イケガミ

そやヨシダ　泣いてたつて仕様無い事や　話ちゃんと詰めよ

ヨシダ

ごめん　——　そやな　それしかないもんな

ツツミ

イシイ　単刀直入に聞くで　ゴウちゃん　なんぼの生命保険に入ってるねん？

イシイ

え？

ツツミ

ゴウちゃん　なんぼの生命保険にはいつてるか聞いてんねん

イシイ

ちよっと待って　ツツミ　——　あんた何云うてるんよ　おかしいんと違う？

イケガミ おかしいんはあんたや 物事ちゃんと見イシイ 今月中に何とかせんとヨシダ子供二人つれたたま 路頭に迷うんやで

イシイ それは解つてるけど そやけど

ツツミ 躊躇してる時間は無いんや イシイ 覚悟決めてしま

イシイ 覚悟てなにやの —— あんたらウチにゴウを殺せて云うてんのか 嘘やろそんな悪い冗談云うの 止めてよ

イケガミ 冗談なんかやあらへん 一番理屈に合うた金の返し方や ゴウちゃんが借りた金はゴウちゃんが返

すしか無いんや —— イシイ あんた今までどんだけゴウちゃんに苛められて来てんねん 憎く 無いんか? あんなへボの男に自分の人生振り回されて 口惜しいと思えへんのか

イシイ そら思うけど そうやからって —— ウチはようせん そんな —— ゴウを殺すやなんて そ んなアホな話無いわ

ツツミ つまりイシイは ヨシダよりもゴウちゃんの方が大切やいう事やな

イシイ そういう話と違うやん そんな人を天秤に掛けるような話と ——

ツツミ そういう話や ヨシダが破滅するかゴウちゃんが破滅するか二つに一つや それぐらいの事 解り いやイシイ あんたはどっちか選ばなあかんねん

イシイ どっちも選べへん —— ウチにはどっちも選ばれへん

イケガミ 甘つたれてる場合と違うんや あんたが腹くくらんと ヨシダ終わりや あんたヨシダの友達と違 うんか 今までいっぱい世話なつた友達を見捨てる云うんか

イシイ そやかて ——

ヨシダ もうええ —— ツツミ イケガミ 帰ろ

イケガミ 何云うてるんやヨシダ まだ話ついてへんやん

ヨシダ 元々ウチが悪いんや あんなしょうも無い男に金貸し続けたウチがアホやったんや 今回の事はイ

シイにとつたら晴天の霹靂や——ごめんなイシイ アホな話持ちかけたりにして あんたには無理な話や 悪かったわ(行こうと)

イシイ 待ってヨシダ ——

ヨシダ (止まった) 呼び捨てにせんとって もうこれからあんたとは友達でもなんでもあれへん 友情踏みにじる奴 ウチ大嫌いや

イシイ そんなん云わんとって —— ヨシダ ウチどないしたらええか解れへんによ —— これって現実なん? ウチ信じられへん

ツツミ 目え覚ますんやイシイ —— あんた立派な看護婦やん 患者さんが回復するよういつもベストを尽くしてるやん —— 今 ヨシダが死にかかっているねん 助けたるのん看護婦としての義務やん

ツツミ ちよつと待ちヨシダ あんたが切れてどないするんや

イケガミ そうやヨシダ —— あんたが一番冷静にならんとあかんねんで このままやったら あんた破滅やで

ヨシダ 誰が破滅なんかするか —— ウチら三人でやるんや —— イシイ 保険金入ったら請求に来るからな 用意しといてや

イシイ 止めて そんなん絶対にせんとって
ウチの金をウチが取り返すんや あんたに云われる筋合いあらへん
ウチヨシダにそんな事させへん

ヨシダ どういてイシイ —— あんたには見えてへんねん 私らが生きてる世界はいつも血だらけや それ

イシイ が見えにくい世の中であんたはのほほんときとるねん 人が生き抜く後ろには 吐き気がする程

ヨシダ たくさんの血が流れてるんや あんたなんか用ない ウチの前ちよろちよろすんな
ヨシダ あんた間違うてる どんな事情があっても 人殺すやなんて —— そんな事許されへん

ヨシダ やつたらあかん事や —— そんなん絶対やつたらあかんことや
自分の命救うのにやつたらあかん事なんかあれへん —— 所詮 あんたにとつたらウチの事なん

か他人事ひとごとやつたんや 自分の手汚すくらいやつたら友達なんか死んでも構へん思てる冷たい人間や

イシイ 違ちがう 違ちがうねんヨシダ —— ウチあんたの友達や 友達やねんて そやから ——
ツツミ 友達やつたら友情見せたらどうやねんイシイ 今まであんたヨシダにどんだけ助けられたんや あ

んたがゴウちゃんゴウちゃんの事で泣いてる時 親身おんみになつて相談に乗つてくれたんは誰や あんた云うてたやないか ヨシダの事尊敬してて あんなエエ奴おらへんて —— その事忘れたんと違ちがうやらな

イシイ 忘れてへん —— 忘れてへんねん ヨシダはウチの尊敬する友達や —— けど ——

イケガミ イシイ あんたの苦しい気持ちはよう判る —— ウチもそうや 今でも苦しいんや 毎日睡眠薬

飲のまな寝ねられへん —— そやけどウチは救われたんや ヨシダとツツミに救われたんや ええか
イシイ ウチはウチの為にエイジを殺ころしたんや それを手助けしてくれたんがヨシダとツツミや

イシイもそう違ちがうん? —— ヨシダの為ためばかりやあれへん 自分の為ためにやるんや あんた

の子供こどもの為ためにやるんや —— イシイ この先もゴウちゃんゴウちゃんにあんたの生活せいかつかき回まわされたいんか?

あんな男 切れるうちに切きつてしままうんや 今いまがそのチャンスや 判わかるやろイシイ

イシイ —— ウチと —— ウチの子供こどもの為ため ——

イケガミ そうやイシイ —— あんたとあんたの子供こどもの為ためや —— それがヨシダも救すくうんや

天空てんくうで、黒い小鳥こどりが鳴ないた。

イシイ、見み上げながらゆゆっくりと立たち上がった。

イシイ ——— ウチと ——— ウチの子供の為に ———

音楽。

ヨシダ、ツツミ、イケガミが去った。

イシイ

——— 「お母ちゃん お父ちゃんがな 映画連れて行ってくれるねんて」「そうかお父ちゃん そんな事云うてたん」「お父ちゃんいつ帰ってくるんかなア」「そやなアマサルが今度のテストで百点取ったら帰ってくるん違う」「ホンマ？」「ホンマや テレビばかり観てんとちゃんど宿題せな」「うん 僕いっぱい勉強して百点取るからな」「頼りにしてんで マサル」「お父ちゃん 何処で寝てんのかなア 寒ないかなア」「さあなア」「ご飯ちゃんと食べてるやるか」「お父ちゃんはお酒がご飯やからなア」「そやけど お母ちゃんのカレー好きやでお父ちゃんは」「当たり前や お母ちゃんのカレーは世界一やねんからな」「あいな お母ちゃん 僕が百点取ってお父ちゃんが帰ってきたらな カレー作ったらきつと喜ぶわ お母ちゃんが毎日カレー作ったら お父ちゃんもう出て行けへんと思うけどなア」 ——— 「きつともう出て行けへんと思うけどなア」 ———

イシイ、ぼんやり佇んだ。

更衣室。

四人、着替えながら、

◆ Act 12

ヨシダ カレーか それで行こか

イケガミ カレーに毒盛るん？

ツツミ アホ そんな事したら一発でバレルわ 睡眠薬混ぜるんや

ヨシダ さすがツツミや 頭エエ ゴウちゃん イシイの家呼んで 睡眠薬入りのカレー食べさすんや

イシイ 子供ら くないしたらええの？

ヨシダ あんたの母親とこ預けるか ウチの家連れてきてもええで プウちゃんとアアちゃんが居るから一緒に遊んでくれよるわ

イシイ 判った —— ウチはゴウ呼び出して カレー作っとつたらええねんな

ヨシダ そういう事や —— イケガミ あんた薬剤に上手い事云うて ハルシオンとカリウム貫といで判った ——

イケガミ ヨシダ またエアー ポンプする気か？

ツツミ あかんやろか？

ヨシダ いっぺんやった事は避けた方がエエ思うけどな

ツツミ そしたらどないしょ —— ツツミ エエ考えあるか？

イケガミ そやなア —— どっちにしても病院に運ばれてから 死んでもらうんが一番ええねんけどな ——

イシイ 急性アルコール中毒はどないやろ 寝入ってるゴウちゃんに ウイスキー死ぬほど飲ませるねん —— (倒れそうになる)

イシイ 大丈夫か

ヨシダ —— うん 大丈夫 ——

ツツミ ウチら皆の幸福の為や 氣イしっかり持ちや

イシイ 判ってる ——

ツツミ ウイスキー飲ませるんはええ考えやけど 寝てる者にどうやって飲ませる？

イケガミ 点滴で直接静脈から送り込んだらか？

ヨシダ マーゲンチューブや——ゴウちゃんの鼻の穴からマーゲンチューブ突っ込んで ウィスキーを

直接胃に流し込んだるんや

ツツミ 水の静脈注射した方がええな 血中アルコール濃度が高なりすぎるやろ

イケガミ ついでにインシュリンもポンプしたらええわ

イシイ ——(再び倒れそうになる)

三人 大丈夫か イシイ?

イシイ —— 大丈夫 —— ウチがしっかりせなあかんねんもんな ヨシダとウチと子供らの為や

ヨシダ それと友情の為や —— ウチら四人 力合わせて生きていくんや 胸張って堂々と生きて行く為

や

イシイ うん ——

ツツミ もし現場に立ち合うのが嫌やったらイシイ —— ゴウちゃん寝かせたら 外で待とつたらええ

わ 後のことはウチら三人でやるから

イケガミ 終わってから 救急車は呼んで貰わんとあかんけどな

イシイ 練習しとくわ ——

四人、着替え終わった。

電話が鳴った。

ツツミ、受話器を取った。

ツツミ はい控え室ですけど —— はいツツミは私です —— え? —— はい —— 判りました

至急全員 オペ室の方へ廻します —— あの すみませんが 私も立ち会って宜しいでしょう

か? —— タザワさん 私の受け持ちなんです お願いします —— はい 済みません ——

すぐ向かいます

ツツミ、受話器を置いた。

ツツミ タザワさんの容態が急変した——皆すぐオペ室行って——

全員 (厳しい表情になった) 判った——

ツツミ ヨシダ ナースキャップ貸して ウチも立ち合う

ヨシダ (渡して) ツツミ あんたのせいと違うんや——取り乱したらあかんで

ツツミ (着けて) 判ってる——

オペ室。

手術開始のブザーが鳴った。

62

執刀医 これより タザワミチロウ氏の腎臓摘出の手術^{オペ}を執刀いたします 執刀担当のトクオカです 皆さ

んベストをつくしましょう

全員 (一礼) お願いします

執刀医 メス!

「カルメン」の音楽が、高らかに鳴り響いた。執刀医、まるで指揮棒を振るうように、蝶のように舞い、カニのように切った。

看護婦達、執刀医の指示に合わせて機敏に対処してゆく。まるで、激しいダンスを踊っ

ているようだ。

心拍数の低下を示すグラフが、下降の一途をたどっていった。

執刀医も、看護婦たちも、一人の人間の命を救おうと必死である。

やがて、心臓停止を示す電子音が無情に響いた。

看護婦達、口々に「タザワさん！」と口惜しげに呼びかけた。

執刀医

(時計を見て) —— 午前十時二十七分 心停止 —— 記録したまえ

ヨシダ

はい —— (記録する)

執刀医

残念ながら手術は失敗に終わったが 君たちの最善の努力には感謝します ありがとう —— 遺

族の方々には私の方から事情を説明します —— お疲れ様でした

全員

(黙礼)

執刀医、去った。

ツツミ、椅子に座り込んだ。ヨシダ、イケガミ、イシイがツツミの周りに寄った。

ツツミ

—— 大丈夫や —— こんな事は日常茶飯事や —— ウチが何年看護婦やってたと思ってるね

ん(顔を覆った)

ヨシダ

泣くなツツミ 死んでゆく者は仕方がないんや その人の寿命や ウチらがどんだけ手をつくして

も 最後には神さんが采配しはるんや あんたはベストをつくしたんや 胸張り ツツミ

ツツミ

—— 判ってる

ツツミ、立ち上がった。

ツツミ 今晚決行や——しつかりやらな

イシイ ——ヨシダ ひとつ聞きたい事がある——ゴウの命も神さんの采配なんか？

ヨシダ そうや 神さんから見たら 人間もバクテリアも同じや 命と命が生きる為に必死で戦うて

る 滑稽で無様な姿しか見えてへんねん——イシイ 生きて死ぬ事は無様の積み重ねや ウチ
らはその中を生き抜いていかなあかんねや！

音楽。

四人の看護婦たちが歩き出した。

エイジ、ゴウ、ミチロウ、ヒデキが現れ、それぞれのパートナーに話し掛けた。

◆ Act 13

エイジ なあ お前 ホンマに殺るんか

イケガミ あんたの知った事と違う

エイジ お前が俺を殺ったんは判る そやけど他人の人殺し手伝う云うんは どういう事や？ 止めとけ

そんな事したらお前 一生後悔しても 後悔しきれんぞ

イケガミ うるさい ウチは友達の為にやるんや あんた黙っというて

エイジ 逃げるんやったら今しか無いんや——お前ヨシダに騙されてるだけや 夜逃げしろ 今やった

らまだ間に合う どうか遠いところへ逃げろ

イケガミ うるさい云うてるやろ——なんでウチが夜逃げせなあかんねん ウチはヨシダに助けられたん

や 今度はウチがヨシダを助けたるねん それが友達としてのウチの務めや——もうウチに纏
わりつかんというて

エイジ
行くな そっち行ったら お前 破滅やぞ
イケガミ
ウチが選んだウチの人生や 死人は黙るとき

エイジとイケガミ、去った。

ゴウ
（電話で）もしもし お前か —— 何の用や

イシイ
この間は悪かったわ あんなに取り乱してしても —— ヨシダがあんたの借金いつでもエエて
待ってってくれるて云うてるんや ——

ゴウ
そうか

イシイ
お詫びの印云うたらなんやけど 今晚ご飯食べに来えへん？ ウチカレー作っとくから あんた好
きやったやろカレ——

ゴウ
子供らも一緒か？

イシイ
あたりまえや マサルもヒロミもキミも楽しみに待っとるわ

ゴウ
判った —— そしたら今晚行くわ

イシイ
七時頃来て —— ウチ用意しとくさかい そしたらな

ゴウ
あ ちよっと待ってくれ

イシイ
なんや？

ゴウ
—— 俺も反省しとるんや —— 今度こそマジメに働くから もう一遍やり直されへんかなア

ヨシダの借金もちよつとづつ返していくし ——

イシイ
—— そうか 判った 今晚話しよう ——

ゴウ
おう —— ほんならな 七時に行くわ

イシイ
待ってるわ

ゴウとイシイ、去った。

ミチロウ

ツツミさん あの黒い鳥 何処に飛んで行ったかと思とったら 俺の腹の中に居ったんや 俺の体の中で どんどん大きくなりながら 風船ついついとったんや

ツツミ

知ってたんです —— 御免なさい タザワさん ウチの口からは とてもよう云わんかったんです 許してください

ミチロウ

許すも何も ツツミさんはようやってくれた —— 俺はホンマにツツミさんに感謝しとるんや

ツツミ

ウチは悪い女なんです タザワさんが思てるような女と ホンマは違うんです —— ウチは人殺しなんです

ミチロウ

人殺し？ツツミさんが？

ツツミ

はい

ミチロウ

なんでまた人殺しなんか 友達が居るんです 小学校から一緒のかけがえのない友達です その子病気なんです 嘘付いて友達のお金取ったりする子なんです その娘にそそのかされて ウチは人殺しをしました —— 今

ツツミ

晩も またやります ——

ミチロウ

物騒な話やなア —— なんでそんな娘と友達で居るんや ツツミさん 判りません —— 只 泣きよるんですその娘は —— ウチにしがみついて大きな声で泣きよるんです

ツツミ

「怖い」ゆうて 「ウチの事ぎゆうって抱いて」ゆうて泣きよるんです その娘の背中を強く抱いてあげながらウチも泣くんです この娘の為に何でもしてあげたいで思ってしまうんです じゃないと ——

ミチロウ

そやないと？なんや？

ツツミ

その娘の背骨がキリキリ鳴きます　キリキリ鳴いて　背中が破れて　影法師が伸びてゆくみたいにその娘が後ろからどんだん大きくなってゆく気がするんです　ウチはあの娘が恐ろしい　それでいととめどなく愛しい　——　そやからウチは　あの娘の影法師になつてやろつて決めたんです

ミチロウ

恐ろしい話や
仕方がないんです

ミチロウ

世界は仕方の無い事ばかりやなア

ミチロウ、ツツミ去った。

ヒデキ

(ビニール包みを差し出して) 約束の春日大社のバンビちゃん肉や　刺身にしてもタタキにしても美味しい　鹿のすき焼きもおつなもんや　どや今夜はこれで一杯

ヨシダ

鹿の肉なんかウチは食わんで云うたやろ　——　それに今夜はウチ忙しいんや　今度にしてんか⁶⁷

ヒデキ

なんや　恋人でもできたんか

ヨシダ

(笑つて) 恋人? そんなもんウチはもういらん　——　男なんかよりもっとゾクゾクする事があるんや

ヒデキ

それは素晴らしいこつちや　——　あんまり深みにはまつて　お縄頂戴せんようにせえよ　——　捕まつた時は死刑確定やろしな

ヨシダ

アホ(頭を指して) あんたとはこの出来が違うんや　ウチの事より自分の事心配しい　神さんの使いなにか撃ち殺してたら　そのうち天罰が下るで

ヒデキ

怖い怖い　エイジ君みたいな天罰やつたら御免こうむりたいもんや

ヨシダ

ハハハ　——　そのうち考えとくわ　それよりなヒデキ　ちよつと友達になりたい看護婦が居るんや　また電話入れたつてくれへんか　毎日三十回　明日から一週間頼むわ

ヒデキ

判った——なあヨシダ 今度秋口に鹿撃ち行こ思てんねんけど こんどこそ一緒に行こうや
——ヨシダのやつてる事には及ばんかも知れんけど 鹿撃ちは鹿撃ちでおつなもんや 騙された
思て一遍一緒に行こて

ヨシダ

ウチはそんな事せんで云うてるやろ

ヒデキ

そんな事云わんと一遍行こて

ヨシダ

しつこい男 ウチ大嫌いや

ヨシダ、ヒデキ去った。

◆ Act 14

どこかの静かな原っぱである。

ヨシダ、ツツミ、イケガミ、イシイが現れた。

四人、ナースキャップを順番に捧げ持ちながら、ナイチンゲール誓詞を唱えた。

ヨシダ

(ナースキャップを捧げ持ち) 我はここに集いたる人々の前に厳かに神に誓わん (渡す)

ツツミ

(頂いて) わが生涯を清く過ごし わが任務を忠実に尽くさん事を (渡す)

イケガミ

(頂いて) われは全て毒あるもの害あるものを絶ち 悪しき薬を用いることなく また知りつつこ
れを勧めざるべし (渡す)

イシイ

(頂いて) 我はわが力の限りわが任務の標準を高くせんことを務むべし (渡す)

ヨシダ

(頂いて) わが任務に当たりて取り扱える人々の私事の全て わが知りえたる一家の内事の全て我
はヒトに漏らさざるべし

全員

われは心より医師を助け わが手に託されたる人々の幸の為に身を捧げん ——

ヨシダ、四人の中央にナースキャップを置き、小さなビンに入ったエタノールを降り注いだ。

ヨシダ

今夜一晩　ウチらは看護婦の精神を捨てる　――

ヨシダ、ライターをイシイに差し出した。

ヨシダ

イシイ　あんた火イ点け

イシイ

――　判った

イシイ、ライターを受け取り、恐る恐るナースキャップに火を点けた。暗闇の中、ナースキャップがめらめらと燃え上がった。

終わり

参考文献

森功 「黒い看護婦 福岡四人組保険金連続殺人」
新潮社（新潮文庫）2007年